

## AG5 だより

日本人学校・  
補習授業校を  
応援します！バイリンガル・バイカルチュラル人材の育成に向けて  
——台北日本人学校における日本語指導への取り組み——

AG5委員・東京学芸大学国際教育センター准教授 見世 千賀子

2018年4月から台北日本人学校では、新たに近藤裕敏校長先生の下、飯塚由美先生をプロジェクト・コーディネーターとして、また日本語教育が専門の服部美貴先生（国立台湾大学日本語文学系専任講師）に協力者として加わって頂き、台湾でのAG5プロジェクト2年目がスタートしました。今回は、台北日本人学校で取り組んできた「日本語指導を必要とする子供への日本語補習のプログラム開発」について、(1)DLAを活用した日本語力の把握、(2)日本語補習の授業実践を中心に、これまでの取り組み状況や成果、課題を報告します。



## DLAを活用した子供の日本語力の把握

一八年度は、まず日本語補習を希望する子供を対象に、その日本語力の把握を試みました。方法としては、

二〇一八年度も昨年度と同様に、台湾の日本人学校には、日本と台湾の国際結婚家庭の子供を中心に、日本語指導が必要な子供が多く在籍しています。台北日本人学校（以下、台北校）は小学一・二年生において、週一回、五時間で授業が終わる水曜日の放課後に日本語の補習授業を行っています。これは「日本語補習」と呼ばれ、一回三十五分間、五月〜翌年二月の間に全三十一回行われていきます。今年度は、両学年共、約二十名ずつの希望者が参加しています。台北校では、子供の実態をよく把握している各学年の担任教師陣（各四名）が日本語補習も担当しています。日本国内の学校における外国人児童生徒への日本語指導体制は、通常、日本語指導の担当者と在籍学級の担任は別であり、どう連携を図るかが課題となっています。台北校の体制は、在籍学級と日本語補習を有機的に連携させて指導できている点で、特にメリットがあると言えます。

個々の子供の言葉の力の弱みや強みを知り個々の指導に役立てるため、文部科学省の「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント」(DLA)を活用しています。DLAでは、「はじめの一步としての導入会話と語彙力チェック」、「話す」、「読む」、「書く」、「聴く」の五つの観点から、子供の日本語力を把握することができます。本来、DLAは日本国内の外国人児童生徒等を対象にしているため、台湾在住の子供たちには適さない部分もあることや測定可能な分野も限られていることに加え、時間的制約やテストの力量の問題があります。それでも、本プロジェクトではできるところから始めてみることにしました。

まず「はじめの一步としての導入会話と語彙力チェック」を行いました。担当したのは飯塚先生、服部先生、教務主任の野々村先生です。また、子供の言語能力を捉える上で、母語の発達状況はとても重要な要素です。そのため、中国語の力も把握するために、同じ内容を中国語でも実施しました。担当は、台湾人の中国語講師の簡先生と林先生です。チェックは、昼休みの時間に一人当たり約五分程度、数日間で行いました。導入会話では、「名前は何ですか」「何年生ですか」「何歳ですか」「誕生日はいつですか」「ひらがなは読めますか・書けますか」「カタカナは読めますか・書けますか」「〇〇語は読めますか・書けますか」など合計十六の問いがあります。語彙力チェックでは語彙カードを使用して、描いてある絵の内容を単語レベルで発話させます。例えば、体の一部、動植物、学校にあるもの、日常生活の動作、形状等で五十五項目あります。新一年生の結果は全体として、導入会話の質問にはほとんどの子供が日本語も中国語も九〜十の割合で回答できていました。両言語とも導入会話と比較すると正答率は語彙力の方が低く、語彙力チェックの正答率は日本語では八割、中国語では七割の子供の数が最も多くなっています。導入会話で使用される程度の日本語や中国語には、家庭や入学前の幼稚園等で触れてきたことが伺えます。日本語の語彙では、「目」「口」は言えるが、「まつげ」「唇」はわからない。「屋根」や「引き出し」が回答できない子供が多かったです。これは、日常でよく聞く語彙は身に付いているが、あまり耳にしない語彙は身に付いていないことを示しています。例えば「屋根」については、台北では

屋根のないコンドミニアムに居住することが多いという環境に影響されていることが考えられます。

個々の子供の語彙力を見ると、正答率が「日本語の方が高い」か「中国語の方が高い」のいずれかにはほぼ分かれます。両言語とも語彙で十割正答した子供はいませんでした。個人差はありますが、全体としてはよく回答できているとの印象です。

以上より今年度、日語補習を受けるとほとんどの子供は一年生のスタート時点で、基本的に平易な日常会話が可能で、日常生活レベルで使用する簡単な語彙についても、ある程度習得できていることが把握できました。

新二年生は、導入会話の正答率については、数名の子供は七〜九割となっていますが、ほとんどの子供が十割できています。中国語についてはほとんどの子供が九〜十割できています。日本語の語彙力は、七〜八割と九〜十割が約半数ずつで、新一年生と比べて全体的に正答率はやはり高くなっています。

新二年生は、昨年十二月に、第一回目のDLA調査として同じ導入会話と語彙力のチェックを行っています。両方のデータがある子供について、昨年十二月と今年四月の結果を比較すると、日本語の語彙力につい

ては、十四名が上がっていて、三名は下がっています。中国語については、十一名が上がっていて、八名が下がっています。

テストを担当した中国語の先生からは、一部の子供は昨年に比べて母語である中国語が出にくくなっているとの感想が聞かれました。日本人学校に通うことでの中国語力への影響が伺えます。

今年度の開講式では保護者に向けて、子供たちがグローバル人材としてとても有望であること、日語補習でしっかり日本語を学習すると同時に、家庭では中国語も大事にしてほしいということを伝えました。

### 日語補習の授業実践

AG5の日本語指導は、子供たちが「今」持っている言葉の力を駆使して、「いざれ」ではなく「今」も在籍クラスの授業に参加できるように支援するプログラムを目指しています。そのためには、「教科学習と関連付けた日本語指導プログラム」の開設が不可欠です。今年度前半の日語補習プログラムは、二月に実施した国内研修会で、参加した先生方と共に計画を作成し、実践しながら、修正を加えることにしました。

新一年生は、先のDLAの結果と四月に入学してから五月十六日の日語補習の開講式までの学校での様子を基に、一年生の先生方が判断し、子供を次の三グループに分けて指導しています（おおよそ六〜七名ずつ）。

①「話す・聴く」に重点を置いたコミュニケーション能力を高めるグループ（主に学校生活でのコミュニケーションがスムーズでない子供を対象）

②「読む」に重点を置いた指導をするグループ（主に会話にはさほど問題はないが、読む・書くに課題がある子供を対象）

③「書く」に重点を置いた指導をするグループ（主に会話に問題はなく音読もできるが、書くことに課題がある子供を対象）

まず、第一回となる開講式では、子供たちは簡単な自己紹介を行いました。二、三回目は学校生活について学ぶ内容になっています。例えば水泳学習の事前説明について、在籍クラスでの全体説明では十分に理解するのが難しいであろう内容の確認が行われました。①の会話重視グループでは、輪になって一つのぬいぐるみを渡し合い、ぬいぐるみを持つた人の名前をみんなで言い合うゲー

ムや、手製のすごろくを使い、止まったマスに書いてあることを読むゲームをしていました。②の「読む」に重点を置くグループでは、学校で使うものの絵等がしりとりで描かれているプリントを使い、名称を言ったり、ひらがな表で五十音の確認をしたりしていました。③の「書く」グループでは同じプリントを使い、ひらがなで名称を書くところまで進めています。先生方の工夫により、子供たちは楽しく言葉を学んでいます。

当初の計画ではその後、国内の学校の日本語指導で外国人児童生徒を対象に実践されているJSLカリキュラム（日本語と教科の統合学習）の視点をういた、国語や算数、生活科や行事の先行学習を構想していました。しかし実際に日語補習を進めてみると、台北校の実態とずれるようでした。今後その要因を明らかにし、修正していきたいと思えます。新二年生は、主に習熟度面から四つにグループ分けをしています。導入会話や語彙力チェックでも正答率が低めだった子供は三〜四名程度の少人数のグループにして、教師とより密なコミュニケーションを図れるようにし、後は五名前後のグループとなっ



と同様に自己紹介を行いました。紹介の文章はよりレベルの高いものになっています。一人ずつ事前に次のようにワークシートのかつこの空欄に内容を記入し、当日それを基に全員の前でスピーチをしました。

〔例〕「わたしの名は(○)です。わたしの好きな食べ物(○)は(○)です。なぜならば(ねん土をつかっています)いろいろな形ができるからです。わたしは日本(○)が(好きです)。(○)としてかという(ともだちとしてやべれるからです)。(○)から、(○)週水(○)日に日本(○)を(○)します。わたしは(日本(○)を(○)るのを(○)りたいです)。(○)も(○)ります)。(○)で(○)のスピーチ(○)します。』

この自己紹介のスピーチは、自分

の意見を伝えたり、理由を説明したりする日本語のスキルを学ぶこともでき、教科学習にもつながるものになっています。台北校の先生方はICT機器の使用に慣れていてとてもよく活用されています。二回目以降は、先生方が順番に主にキーノート(プレゼン資料作成アプリ)を利用してねらいにそった教材を作成し、子供が楽しくわかりやすく学べる工夫をされています。基本的にどのグループも同じ教材を使用して指導を行います。

例えば子供が見て喜ぶ写真を映し出し、様々な擬態語(ふわふわ、はらはら、すくすく等)を学習していました。子供たちは、気球が飛んでいる写真や子猫がミルクを飲ませてもらっている写真等を見て、何をしているところか、活発に言い合い、日本語に多く使用される擬態語を学んでいました。この日語補習は、単元自体を扱うものではありませんが、在籍学級での教科学習に関連付けられた意義ある実践です。

日語補習は週に一回のみですが、先生方はその効用を次のように捉えています。

- ・ 少人数で行うメリットで、子供たちに居場所を与えることができている。

・ わからないことも恥ずかしがらずに質問することができる。  
 在籍クラスにおいても、これらのことが可能になるような指導を目指したいと考えています。

**授業にJSLカリキュラムの五つの視点を**

子供たちは多くの時間を在籍学級で学んでいます。また、小学三年生以上になると学習内容の抽象度がよくなり上がっていきます。しかし、台北校では日語補習は二年生までです。

日本語指導を必要とする子供が在籍するクラスでは、やはり通常の授業における日本語指導の視点が必要です。その際、役立つのがJSLカリキュラムの考え方です。特に次の五つの支援の視点を意識して頂けると良いと思います。

- 理解支援 「わかった!」と思える手立て(例: 視覚化する、比喻を利用する、例示する)
- 表現支援 理解したこと、考えたことを自ら発信できる手立て(例: モデルを示す、語彙や表現を例示し選択させる)
- 記憶支援 学習したことを定着させるための手立て(例: 手や体を動かす動作と結びつける、リズム

カルに言う)

○ 自律支援 自分で学習が進められるようにする手立て(例: わからない時は先生や友達に聞けるように、自分で調べられるように)

○ 情意支援 やる気、学習に興味・関心・意欲を持たせる手立て(例: 学習の見通しを持たせる、達成感を持たせる)

こうした取り組みは、すでに多くの先生方が行っていることかと思いますが、今一度日本語がよく理解できていない子供の視線にたつて、自らの授業を振り返ってみて頂ければと思います。台北校では、昨年十二月と今年五月に先生方を対象にJSLカリキュラムの研修会を行いました。九月には台中日本人学校でも合同研修会を実施する予定です。日本語指導を全学年で重要な基本的課題として位置付け、全体で取り組む体制を作ることが必要です。

今後台北校の日語補習プログラムについては、先生方と意見交換をしながら検討を進めたいと思っています。子供の多様性を活かし、台湾にもルーツのある子供たちがダブルデンティティの形成につながる日本語指導ができればと思います。